

霊媒が、犠牲にされる  
牛の回りを踊りながら  
アラック・ヤーン(霊)を招く



調査のコーディネーターだった  
ファン・ダオさん(右)



埋葬のための穴を掘るあいだも  
断続的にゴングを演奏する(ブルー)



葬式では、遺体を入れた棺の周りを  
ゴングを叩いてまわる(ブルー)



こぶ付きゴングと  
平ゴングが併用される  
アンサンブル  
(トゥンブアン)



## ゴング音楽と アラック・ヤーン

寺田 吉孝  
(てらだ よしたか)

本館民族文化研究部



地球を  
集める



### ユニークなゴング音楽

民博では世界各地の音楽・芸能を映像で記録している。わたしもその一部を担当して、東南アジア地域を中心に幾つかの映像作品を作ってきた。カンボジアは、同僚の福岡正太さんと共同で調査を進めている地域であり、現地ではクメール人の音楽学者サムアン・サムさんが率いる研究チームの協力をえてきた。一九九九、二〇〇〇年には、複数の音楽・芸能ジャンルの記録をおこない、特に伝承が危ぶまれていた大型影絵芝居スバエク・トムに焦点をあて、その演目すべてを映像番組として残した。

しかし、それまでの取材対象はカンボジアで大多数を占めるクメール人であり、国内に住む二の少数民族についてはまったく手付かずの状態であった。おりしも、サムさんの研究チームが二〇〇三年にトヨタ財団の援助を受け、北東部のラッタナキリ県において少数民族音楽の実態調査をおこなった。わたしはサムさんとの話し合いから、この地域における映像記録の必要性を痛感し、共同で取材の計画を立て、昨年三月に撮影隊とともに現地に向かった。

東南アジア大陸部の山間地域ではゴング音楽が儀礼の一部として演奏されることが知られていたが、信頼できる民族誌・音響資料は少なく、映像資料に関してはほとんど皆無である状態が続いていた。しかし、わたしたちがこの地域に興味をもっている

のは、単に映像記録がないからではない。彼らが演奏するゴング音楽が他地域では見られないユニークなものであるからだ。

東南アジアは、ゴングとその音楽が重要な視される地域である。日本でも有名になったジャワ島やバリ島のガムランは氷山の一角にすぎず、各地に存在するゴングを中心とするアンサンブルはじつに多種多様である。楽器としてのゴングは、中央に突起のある「こぶ付きゴング」と表面が平らな「平ゴング」に大別されるが、ほとんどのアンサンブルでどちらかの種類のみが使われている。カンボジア・ベトナム・ラオスの山間部は、この二種類のゴングをいっしょに演奏する数少ない地域のひとつなのである。

### 霊の怒りに触れて

ラッタナキリ県には八つの少数民族が住んでいる。今回の調査で訪れたのはクルン、トゥンブアン、ブルーの人のひとりが住む村だった。彼らは、ゴングの音が霊の世界との深いつながりをもち、葬式、動物供犠、結婚式など霊との交流が必要な儀礼においてゴングの演奏は不可欠であると考えている。今回の取材では、ゴングと霊の関係を紹介しうる番組を作ることが大きな目的のひとつだった。

ラッタナキリでは、クルン人のファン・ダオさんに取材のコーディネートを依頼した。ダオさんは、自身優れた演奏家で、クメ

ける取材の難しさを痛感させるのに十分だった。

### 現場の緊張を映像に

結果的には、動物供犠をおこなわなければ体の不調が治らないと霊媒に託宣されながら、牛を買い取らない村人に、わたしたちが資金援助をすることで一応の決着をみた。わたしたちが代金を払った牛を供犠することで霊も満足し(というふう)に長老たちも納得したらしく、牛を買い取るところから、儀礼の準備、霊媒の踊り憑依、ゴングの演奏、牛の撲殺解体にいたるプロセスをすべて記録することができた。しかし、この一連の出来事は、それ以来ずっとわたしの頭を離れない。正直に言って、われわれの存在がダオさんをめぐる現地の人間関係、人間と霊の関係に与えた影響については不明な部分が多い。また、現場での緊張は映像にも写しこまれてはいるはずである。現在、編集をおこなっているが、客観的な記録映像を装うのではなく、部分的にせよ取材のいきさつがわかるような番組制作を目指したい。

そのための補足調査をおこなう準備を進めていた今年七月に、ファン・ダオさんが交通事故で亡くなったという知らせが届いた。アラック・ヤーンの怒りが彼に死をもたらしたのではないことを願いながら冥福を祈りたい。



ール語と複数の少数民族の言語を話すため、この地域の音楽活動のまともな存在である。できるだけ実際の生活のなかでの演奏を記録するために、ゴングの演奏がおこなわれる結婚式や葬式を探してもつたが、記録のために演奏家を集めてもらうこともあった。ダオさんの手配で、ゴング音楽の演目の多くを記録したが、そのなかに動物をアラック・ヤーン(霊)にささげる際に演奏される曲が含まれていたことが予期せぬ事態を生んだ。

数日後、村の長老数人がこの曲に呼ばれた霊が怒っている夢を見たと言い、村に不幸が訪れないようにダオさんに牛を生け贖にするよう迫ったのだ。ダオさんは窮地に立たされたことを、わたしたちにすまなさそうに告げた。このような事態を予期しなかったのだろうかという疑いが頭をよぎるが、わたしたちの取材のために無理をしてくれたダオさんの評判を損なうわけにはいかない。

数回にわたって解決に向けた話し合いがもたれた。現地語を解さないクメール人研究者チーム、クメール語を得意としない少数民族の演奏家たち、ラッタナキリの地方官僚。そしてわたしたち日本人から来た取材チームが、渦中のファン・ダオさんとクメール人の現地通訳を介して、それぞれの立場と意思を理解しようとしながら話を進めた。ここでは詳細を述べることはできないが、そのあいのやり取りはこの地域にお